

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 342

拉致被害者が24年ぶりに帰ってきた「バカが加速している」日本

山梨大学教授の池田清彦がPR誌『ちくま』(02・9)の中で、『加速するバカ化』の表題をもったエッセーを記している。自分の大学の生協に置いてもらっていた『生命の形式 - 同一性と時間』が三冊とも全部、同僚ではなく学生に売れたのでびっくりしているのである。去年の秋に出版した本は自分の担当する生物学教室の掲示板と学生控え室に、二割引と貼り紙したにもかかわらず、買いに来た学生がたった一人であったからだ。今回の本のほうが難しいと思われたのに、である。《今日の大学生の学力低下のすさまじさを知らない人は、大学の生協で難しい本が売れるのは当たり前と思っているかもしれないが、それは違うのである。難しい本は三流大学の生協ではまず売れない。》大型書店でも買うのは中高年の男性ばかりだから、《あと30年も経って、中高年が死ぬかボケてしまえば、硬い本の市場は消滅する》。

もちろん、《硬い本を一冊も読まない人を軽蔑しているわけではない。私の母親は、硬い本は一冊も読まなかった。私が20年来つき合っている大工の棟梁は、誠実で緻密な仕事をする腕ききの職人だが、硬い本は読まないだろう。それでもこの人たちは自分たちが知らない知的世界が存在することを理解していた(る)ことは確かである。自分たちには大学に行く力(金や能力)がなかったことを認めて、そういう力があつた人たちへ多少はジェラシーを含んだ敬意を抱くと共に、自分の仕事に誇りと矜持をもっていた(る)と思う。》

日本の大学生の大半は知への憧れも畏れも皆無である。さらに言うならば、自分がものを知らないことを恥じる気配がまるでない。しかし、エゴだけは肥大しているから、意見は一応エラそうに言う。こういう人たちを指して、バカというコトバ以外に言うべきコトバをさしあたって私は知らない。はっきり言って、現在の日本の大学生の8割は、大学に来てはいけなかった人たちなのである。》

資源のない国における唯一人材の育成の《考えの下に、高等学校の定員を増やし、大学の定員を増やし、ついには大学院の定員まで大幅に増やした。その結果起きたことは、若者の知的能力の向上ではなくて、とどまることのないバカ化であり、《それでも懲りずに、文部省は「ゆとり教育」なるものを推進しようとしている。バカ化にはさらに拍車がかかるに違いない。》微積分の初等物理学もわからず、理科も社会も論理的に理解できない人が《知的能力平等原理主義という科学的にはトンチンカンな思想》に便乗して高校に入学し、大学へやって来るのである。《私がムダだと思うのは、少しでも硬い本を自らすすんで一冊も読むつもりもなく、大学に入学してくる人々である。あるいは

は、辞書を引いても英文の論文を自力で読むことすらできないのに、大学院に進学したいとのたまう学生である。この人たちの多くは、自分がそれに値する能力もないのに、高校や大学や大学院に行くことを不思議だと思っていない。知的研鑽を全く積まないことを恬として恥じていない。理解できないのは教師の教え方のせいだと思っている。典型的なバカである。》

《この数年、学生たちのバカ化はさらに進んだように思われる。インターネットとケータイの普及に原因の一端はありそうだ。私はインターネットもやらなければ、ケータイももっていない。知的生産に何の役にも立たないことがわかっているからだ。(…)仄聞するところによると、ネット上の言説には目も当てられないものが少くないと言う。本は一応、編集者というフィルターを通す。ネット上の言説はどんなフィルターも通さない。質が落ちて当然である。小谷野敦の表現を借りれば、バカが意見を言うようになったのである。インターネットは世界につながっているはずなのだが、彼らは狭い世界の中でバカな意見の交換をするのに忙しく、外部の意見を探ろうとする意欲はないようである。意見はけたたましく言うのだけれども、自分の意見の知的水準に対する内省はまるでない。ケータイもまた狭い人間関係の中だけで、情報をやりとりするのに使われるだけで、外部へつながる契機を奪うように機能している。高等教育の機会拡大が若者のバカ化を加速したように、情報に対するアクセス権の拡大は、若者たちに情報の閉域化をもたらしつつあるように思われる。ケータイで一時間毎にやりとりし、下宿に帰ってネット上の「フォーラム」にゴミのような意見を言うだけで一日が終わってしまう。ケータイとインターネットという最新の道具を使っているのに、本人たちは何か知的な作業をしていると錯覚しているのかもしれないが、大海を知らないインターネットの中のカエルである。》

大学教師らしく、日常接している「学生のバカ化」に腹を据え兼ねているのがありありと伝わってくるが、「若者のバカ化」は掛け値なしに本当だが、「大人のバカ化」が加速していることも本当である。「若者のバカ化」だけが加速するわけではない。「大人のバカ化」が加速する中で「若者のバカ化」も加速しているとみなければ、理屈に合わない。したがって、「学生のバカ化」は「教師のバカ化」も映しだしている筈である。つまり、「学生のバカ化」のおかげで教師という商売が成り立っている輩も多いにちがいない。バカを連発すると、ではお前はバカじゃないのかという声が必ず返ってくる。昔は私も正真正銘のバカ学生であったが、バカがやたらと自信をもつことのおぞましさぐらいはわかっていた。いまでも自分のバカさ加減を恥じる気持もあるし、罪ですらあるという意識ももっている。できるだけ見通しのよい場所を築こうとしてマンガも硬い本も同程度に読む。バカにはいつも濃い霧がかかっているのを体験的に知り抜いている。だから自分の頭で把握し、自分の言葉ですべての事象を翻訳してみようとする思考力や判断力、論理力を日々身に着けることを自分の努めにしている。

それでも何度もバカなことをいい、バカなことを仕出かすが、その度に反省を繰り返

し、なぜそうなったのかを突き止めようとする。バカに付ける薬はないのは、自分がバカであると本当に思っていないバカであるからだ。バカだと自分を責めることが癖になっているバカもいるが、バカな自分を責めるよりも自分のバカがどこからやってくるのかを一向に知らずとしないから、バカの老化に終始する。不況の嵐の中で“貧すれば鈍する”ように、バカも一段と猛威を振るっている。「意見はけたたましく言うのだけれども、自分の意見の知的水準に対する内省はまるでない」のだ。自分がいま何を喋っているのが全くわかっていないのである。もっとも「自分の意見の知的水準」がわかっていたなら、意見が控え目にはなるだろうが。

バカとの議論が成り立たないのは、バカは議論の前提そのものを一切疑うことなく、結論を急ぐからである。議論は結論以上にそのプロセスが大事であり、プロセスが十分なら結論は自ずから導かれていく。精力的なバカほど怖いものはないとはゲーテの言葉であるが、精力的なバカはやたらと突進したがるばかりで、自分の立脚点に一向に注意を払おうとしない。歴史上の愚行はすべて精力的なバカの猛威に支配されてきたことはいうまでもない。肝心なことがわからなくなってしまった幼稚な日本人と呆れつづけている福田和也は、『アホでマヌケなアメリカ白人』（マイケル・ムーア、柏書房）の書物に触れながら、もっと「アホでマヌケな」日本人のタイトルで『闘う時評』（『週刊新潮』02・11・14）を書いている。

9・11テロ以来、厳戒態勢をとっている筈の空港で爪切りやペーパーナイフまで禁止されているのに、彼の同行の愛煙家が携帯していた《バーナー並みというよりは、小型の火炎放射器とでも云うべき凶悪な代物》の強力なライターが検査を通過して、堂々と機内に持ち込めることに不合理を感じていた福田和也は、ムーアの著作によって次のことを知る。

《ムーアによると、銃やナイフやカッターといった当然の禁制品のほかに、「編み棒、鉤針、縫い針、コルク抜き、レターオープナー、ドライアイス」といったやや理解に苦しむものまでが、厳格に禁じられている(...)のにたいして、ライターは持ち込み自由。実際に、昨年12月22日にパリ発ボストン行きの機内に、靴にプラスチック爆弾を仕込んで乗り込み、マッチで点火しようとして、導火線が燃え尽きる直前に取り押さえられるという事件が起こっているのに。

不審を感じたムーアは、著書のプロモーション・ツアーの途中聴衆に問いかけ続けて、アーリントンの書店のサイン会で、若い議会関係者から真相を教えられます。実際にはライターは連邦航空局が作成したリストには含まれていた。ところがホワイトハウスが、タバコ産業からの働きかけによって、ライターを削ったというのです。フライトの間、我慢してきた喫煙者たちが、ロビーで一服する需要がバカにならないから。「プッシュー味はここまであからさまに、人々の安全を軽視できる奴らなのか？ 一方でこんなことをしておきながら、もう一方では毎週のように『次のテロ』の不安を煽るなんて、いったい奴らの面の皮はどのくらいの厚みがあるんだろう。本当に奴らにとっては、タバ

コ業界の要請の方が国民の命より大事なのか？」とムーアは問うています。》

日本で《ライター持込が看過されているのは、政府にタバコ関係企業が働きかけた結果である》よりも、《アメリカの禁制リストを、まったくそのままに、何の検討もせず受け入れている、つまりサル真似をしている》からではないか。《一方で、これまたアメリカ並の喫煙者へのきびしい抑圧を導入しつつ - 千代田区の屋外での喫煙禁止と区職員による路上取り締まりという度し難い岡っ引き条例を、新聞各紙が公德心の復興（産経 11月2日）などとバカげたことを書いているのを見ると、ますます時勢が悪くなっているのを実感して暗澹とします - 、一方でライターの機内持込を認めるという分裂ぶりは、アメリカの猿真似をしているという以外に説明のしようがない。》

福田和也は《ムーアの本を読んでウンザリする》。それは、《教育の破滅的状況や経済的不平等の悪夢的な拡大といったアメリカの現状があまりにも愚劣で、不均衡で、要するに狂っているとしか思えないからではなく、日本もまた、日々そのアメリカに似てきている、から》だ。《コストを削減し、利潤を最大化して、投資家と経営者に莫大な富をもたらした90年代アメリカの繁栄は、かくも無残な、不合理というもバカらしい不平等のもとに達成をされました。政府のデフレ政策がどうあれ、わが国もそういう道をサル真似していく、というより既にしているのですから、日本人は「アホでマヌケなアメリカ白人」よりも、もっとアホだということになるのでしょうか。》と、サル真似日本人の前途のなさに鬱鬱としているが、ムーアが示している航空業界の、「かくも無残な、不合理というもバカらしい不平等」の一例には驚きを通り越して、寒気すら感じる。《ミシガンの空港でアメリカン航空のパイロットと同席をしたムーアは、彼の年収が1万6千ドルあまりと聞いて驚愕をします。しかも、制服代などさまざまな天引きがあって、初年度は手取り9千ドルにすぎない。ムーアはとても信じられず、調査をすると、はたしてかのパイロットの云ったことは本当でした。好景気を支えてきた熾烈な競争のしたで、現場の働き手の賃金がいかに抑制され、コスト軽減の名のもとに切り下げられてきたか。「このところの - 特に、しょっちゅう飛行機に乗る金持ちにとっての - 好景気を考えたら、パイロットにドッグフードよりマシな食べ物が食えるくらいの賃金を支払ったっていいんじゃないかと、あんたも思うだろう（今まで俺は飛行機に乗るとき、パイロットが酔っぱらってないか鼻でチェックしたもんだが、これからはコクピットの側を通るときに、ドッグフードがないかどうか確認することにしよう）。》

9・11テロ以降、アメリカ航空業界は大幅な客離れ等によってより一層のコスト削減とリストラが促進され、それでも熾烈な競争に耐えられず、大手の航空会社が倒産していているが、パイロットらの年収は更に押し下げられているのだろうか。日本人のバカ化だけでなくアメリカ人のバカ化も見せつけられると、世界はバカ化しているのかと思ってしまうが、90年代アメリカの好景気で加速していたバカ化と、90年代（以降）日本の不景気で加速しているバカ化をみていると、バブルの時から加速していた日本人のバカ化が不景気になってより一層露出してきただけではないのかという気がする。

2002年1月の日本で起こったこと - 偽札事件、雪印グループの狂牛病がらみの詐欺まがい、アフガン復興会議へのNGOグループの出席停止、外相更迭、民主党比例代表1位の参議院議員の辞職、公園での爆弾騒ぎ、少年達によるホームレス襲撃、幼児虐待、走行中にはずれたトレーラーの車輪が若い母親を直撃して死亡、いつもながらの男女沙汰による放火等、大企業の倒産の続出、失業率悪化の記録の更新、株価の1万円台割れ等の出来事を記して、橋本治は《これらの事件の背後に、「バブルがはじけてずいぶん長い時間がたつ」という言葉を代入してしまうと、荒廃した一つの心象風景が見えて来るような気がする》と、『婦人公論』(02・3・7)に書いている。

《交通事故が連発すれば、「不景気だから、ドライバーの心も荒廃しているのだろう」と思う。その車に「欠陥がある」ということになれば、「先のない産業構造の中では、会社もすさむのだろう」と思う。以前に問題を起こした会社や人物が、再び問題を起こせば、「またか」と思い、「どうなってるんだ」と思い、そして、「そんなことをするくらい不景気は深刻なのか」とは思わない。「この程度の人達が、好景気の中では人らしい顔をしていたのか」と思う。

不景気になって「いい人」になる人の数よりも、不景気になって、「今までこんな人達が、どうしてまともな顔をしていられたんだろう」と思いたくなる人の方が多い。もちろん、景気回復は「急務」でもあるだろう。年間の自殺者が3万人というのは、尋常な数ではない。しかし、「好景気」というメッキが剥げただけで、「人間の未熟」を露呈してしまう人の多さを見たら、疑問も生まれる。

「好景気」というものが、未熟な人間の野放しにされたエゴを覆い隠すだけのものでしかなかったなら、そんな好景気にはやって来てほしくない。日本の「好景気」がその程度のもだったから、それがつまずいた瞬間から、ろくでもない事件の連発になり、「そこからの脱出」という方策が見えてこない。見えないのは、それを考えるだけの頭がないからだろう。「景気回復」だけを考えて、その「景気がよかった時」の人間のレベルがどの程度のもだったかを考えなかったら、「回復する景気」は、「ろくでもない人間を救済するだけのもの」になるだろう。》

バブルの時はバカの羽振りがよかっただけで、バカであることには全く変わりがなかった。不景気になるとバカの羽振りが悪くなって、橋本治がいうように、バカがより一層露出してきた。不景気はバカを貧相にするが、「好景気」はバカを豊かにするだけで、バカを少しも賢くしないのであれば、確かに『回復する景気』は、『ろくでもない人間を救済するだけのもの』になるだろう。しかし、不景気になっても続いているバカの加速化によって景気は回復するだろうか。これまでのバブルの「好景気」は日本人のバカの加速化の中でも到来したかもしれないが、もうバカの加速化の中での「好景気」は無理にちがいない。「景気回復」もバカの加速化をやめることの回復に比例するような時代に直面しなければならない。実際、「ろくでもない人間を救済する」ことのないような「景気回復」が問われているのだ。

バカの加速化は当然、拉致問題に関して《扇情的で内向的な世論しか育てることができない》マスコミにも及んでいることを、批評家の東浩紀が『週刊現代』(02・10・12)で指摘している。『AERA』9月30日号の表紙に横田めぐみさんの写真が一面に大きく、その上に赤字で「人生を返せ」という言葉を印刷していることに象徴されるように、《「拉致被害者かわいそう」の大合唱》や、《金正日という「悪者」を吊し上げてケリがつくような単純なものではな》く、《北朝鮮に拉致されたと見られる被害者は、韓国にも486人もいる。拉致問題は、日朝の二国間というより、北東アジア全体の問題なのだ。

したがって、再発防止のためには、地域全体の安定が不可欠になる。最終的には朝鮮半島の再統一に繋がるような、大きなビジョンが必要なのだ。

そしてそのビジョンのなかで、日本が果たすべき役割は途方もなく大きい。歴史的な経緯に関して議論があるにせよ、朝鮮半島が分断されている現状に対して、日本が大きな責任を負っていることは否定できない。「自虐史観」や「土下座外交」をいつまでもひきずりたくないのなら、いまこそ、半島の安定にイニシアチブを取っておくべきだろう。それが、いわゆる国益というものである。》

全くその通りなのだが、9・11テロ以降の日本の対応をみただけでも、バカ化が加速する日本にはとても無理な相談であることが歴然としている。橋本治がまた、『婦人公論』(01・12・7)でこう言っていたな。

《小泉純一郎という人に地球全体を見る目はないらしいというのは、夏のジェノバ・サミットで分かったけれども、「そろそろアフガニスタンへの空爆をやめた方がいいんじゃないか」と言われる頃になって、自衛隊の海外における後方支援を認める「テロ対策特別措置法案」が国会を通過する。それを通過させて、この時期になにをしようというのだろう？ それをするということは、「アフガニスタンを中心にして起こった世界情勢のゴタゴタを調整する能力が、日本にはない」ということをアピールすることでしかない。

日本がすることは、「戦争支援」じゃないだろう。「なんだかよく分からない」ことを前にして、「大変だ！」と慌てふためき、ドタバタとよく分からないことを決める。「事前に自分なりの判断で状況を見通しておく」という知性がないから、すべてが後手後手になり、対策が対策としての意味をなさない。狂牛病対策も同じで、「なにもしないでいたから、なにをしていいか分からない」というのは、日本政治の病弊のようになってしまった。「やるべきこと」が、自分達の考える範囲を越えると、もう分からない - 「分からない」が認められないから、場当たりりでわけの分からないことをやる。それは、「総論がない」ということである。

今の日本の総理大臣は、「郵政の民営化」という政策方針にだけは自信があって、それに関しては吠えまくるけれども、それ以外はさっぱりだ。一つの自信ですべてを乗り切ろうとしても、それですべてが可能になるわけではない。すべての物事には、すべて

の物事なりの具体性がある、それを段取りよく理解して行くのを「総論がある」と言うのだけれど、日本の総理大臣にはそれがない。各論だけで総論がない人物というのは、普通トップには立てないはずで、トップには必ず「ヴィジョン」という名の総論がいる。それを持つためには、「自分の得意とする各論から総論を構築し直す」ということが必要なのに、日本の政治家達はそれをする前に、小さな自信ですべてを押し切ってしまう。》「なにもしないでいたから、なにをしていいかわからない」というのは、日本政治だけでなく、日本人の一人一人にも当てはまる。「なにもしないできたのに、なにかをしようとする」から、一層バカ化が加速されていく。生きていく理念もヴィジョンもなければ、当然総論もない。「自分の得意とする各論から総論を構築し直す」必要があるのは、日本の政治家達ばかりではない。我々に必要なのは、個人、家族、集団にかかわって、部分としてではなく、総体として生きていくことであり、そうでなければ、たちまち座礁して自分が狭い場所に閉じ込められ、自分で自分の首を締めていくことになる。もちろん、バカの加速化は不断に自分の人生を「構築し直す」ことと逆行している。

拉致問題について、《核査察受け入れの可能性や、ミサイル発射のモラトリアム延長を引き出したこの会談が、今後の北東アジアをどのように変えていくのか、冷静で長期的な視野に立った分析はほとんど聞こえてこない。》のは、「なにもしないでいたから、なにをしていいかわからない」からである。マスコミはそうした《分析力の無さを露呈しているだけ》でなく、引き裂かれた肉親の情に訴える紙面構成によって、ここぞとばかりに商売に精を出し、扇動的なムードで日本列島を覆い尽くそうとする。《マスコミの批判能力の欠如、ポピュリズムへの迎合》によって、W杯で《若者たちは、素朴に、何も考えず、「日本人だからニッポンを応援するのは当然だ」という論理で、日の丸を振り、君が代を熱唱する。》というお祭り気分を演出し、その気分が「本物のナショナリズム」の形成にどのような影響を与えるのかについては、全く無責任であるのと今回も全く同じ構造である。

《判断能力のない若者は、ただ、与えられた消費財に飛びついたにすぎない。その素直さが問題だという主張も分かるが、それ以前に、厄介な現状分析を回避し、「おれたち日本人だから」的な題材を与えておけば視聴率が伸び、部数が増えるという安易な選択に陥っているマスコミの現状をこそ問うべきではないのか。》と東浩紀はいい、《北東アジアの情勢が大きく動こうとしているときに、この国のマスコミは、扇情的で内向的な世論しか育てることができないでいる。(…)もしこのままの状態が続くとすれば、将来に大きな禍根を残すことになるだろう。北朝鮮を許す必要はない。しかし、「絶対に許さない」と叫んでいても、何も問題は解決しない》と強調する。この若手の論客の声が届くような国ではないし、マスコミではないし、各日本人ではない。北朝鮮を「絶対に許さない」という声の高まりを日本外交における画期的な第一歩と捉えるその自讃のどこに、一体、日本人の成長ぶりが窺えるだろう。

マスコミのバカの加速化について、フリージャーナリストの玉木明が『毎日新聞』(0

2・10・29)でその一例を指摘している。24年ぶりに故郷の佐渡島に帰ってきた曾我ひとみさんが、車中で綴った「人々の心、山、川、谷、みんな温かく見えます」という言葉をもって挨拶した一件を当然、どの新聞も取り上げた。

読売新聞の「よみうり寸評」(18日夕刊)は、坂口安吾の「ふるさとは語ることなし」という言葉に並べて、啄木の「ふるさとの山に向かひて言ふことなし ふるさとの山はありがたきかな」の一首を引く。

毎日新聞の「余録」(22日朝刊)は、啄木の「かにかくに<sup>なまり</sup>浜民村は恋しかり/おもひでの山/おもひでの川」と、「故郷の訛なつかし/停車場の人ごみの中に/それを聴きにゆく」という有名な二つの短歌を引き合いに出す。

朝日新聞の「天声人語」(23日朝刊)も、「ふるさとの訛なつかし……」の引用。《なによりも<故郷とかけて、啄木と解く>式の、その俗っぽい手つきが気に入らない。》と評する玉木明は、《日本を代表する3大紙が揃いも揃って啄木とは、恐れ入った話である。これを恥ずかしく思わないとすれば、記者意識の頹廃というべきだろう。なぜ、こういうことになるのか。》と憤る。啄木には周知の如く、「石をもて追はるごとく/ふるさとを出でしかなしみ/消ゆる時なし」などの歌もあり、啄木の「故郷」が故郷の人々への憎悪と感傷の入り混ざった幻像であることを踏まえるなら、いくら「<故郷とかけて、啄木と解く>式」であっても、拉致されて24年ぶりに帰ってきた曾我ひとみさんのそのものとしての故郷(に限りなく近い)と結びつく筈がないのがわからなくてはいけない。

《筆者が現場に足を運ぶことなく、ただ机に向かって記事を書いているからにちがいない。一步でも佐渡島の地を踏んでいれば、まったくちがった記事になっていたはずだ。少なくとも、啄木などを引っぱり出さずにすんだはずである。》と玉木明はいうが、「筆者が現場に足を運ぶことなく、ただ机に向かって記事を書いている」としても、曾我さんの故郷と啄木の「故郷」が重ならない異質であることがわかる知性と教養を備えていなくてはならないのだ。三大新聞の筆者たちは「一步でも佐渡島の地を踏む必要があっただけでなく、啄木の「故郷」の地にも一步でも踏む必要があったのである。

玉木明が「一步でも佐渡島の地を踏んでいれば、まったくちがった記事になっていたはずだ。」といいきるのは、19日夕刊の毎日新聞の、《曾我さんの故郷・佐渡島を3枚の写真と文章で探訪した記事》の中に、曾我さんの言葉を紹介したあと、「しかし、曾我さんの言葉には佐渡の四方を囲む絶対的存在である『海』が無かった。19歳で突然、拉致され船に乗せられ引き離された故郷。父、母、妹、友人……。自分を支えてくれたすべての人たちと離れ離れになった。/『海』をあえて入れなかったのは、その時の絶望的な悲しみを封印するためのような気がしてならない」という、《その海の光景を目の前にした記者にしかわからない発見がある》記述に出会っているからだ。そして、《それを敏感に感じとった記者の感受性が、この記事の生命だといっていい。まさに<現場を踏まずして、記事を書くなかれ>である。》と戒めている。だが「現場」に関してい

えば、曾我さんの文章の中に「海」という言葉が見当たらないのを机上で見つけるほどの「現場」性が、その机上には欠落していたという問題もここで提出されているだろう。

《「報道の自由」というけれども、テレビでいえないこと、公に書けないことなら、いくらでもある。それどころか、自主規制をしているために、「考えもしない」ということが多いはずである。北朝鮮なら、そのうち変わるに決まっているといえるが、われわれ自身はどうだろうか。自由だと思いこんでいる分、たちが悪いかもしれない。外の世界に参考資料がないから、自分を訂正する契機がない。グローバル化することは、地球全体が北朝鮮になることかもしれない》という養老孟司は、『中央公論』(02・11)のエッセーで、《テロリストの言い分を喋ったとたんに、袋だたきにあうに違いない。それならだれも喋りはすまい。ということであれば、これも一種の北朝鮮状態ではないか。偉大なるわれらが首領様の言い分を繰り返すのと、本質的に似ていないか。》と、日本のみならず、世界のあちこちに見え隠れしている「北朝鮮状態」を皮肉る。

バカの加速化は「あんなことならもうすでに知っている」と皆が思い込む中で起こっていることを、養老孟司は教えてくれる。

《テロなら「知っている」。アフガンが爆撃されたことは「知っている」。男子は子どもを産むことはない。夫婦の思わぬ難問は結婚以前にすでに始まっているのである。厚生労働省の研究所の調査でわかっていることだが、日本の普通の家庭では、結婚後15年まで、夫から妻への愛情は横ばいだが、妻から夫への愛情はひたすら右肩下がりののである。/統計的な解析で、その理由までわかっている。「夫が子育てに協力しなかった」。それが理由である。右肩下がりで、最後は定年離婚に至る。その遠因は子育てにある。子育てへの協力とは、オムツを洗うことでも、炊事をするということでもない。生む性への理解である。それに対して、すでに結婚前の若者たちが、「そんなことはすでに知っている」という。》

「そんなことはすでに知っている」のに、いつだって「なにをしていいかわからない」のである。だから養老孟司は、《われわれはなににごとであれ、「すでに知っている」世界に住んでいる。なに、なににも知ってやしないのである。テロの現場にいたところで、ほとんど五里霧中、すぐ身の回りのことですらよくわからないはずである。何十年一緒に住んで、女房の気持ちがどこまでわかるか。それがわかっているなら……》と、目をかっと見開いていう。「それなら知っている」という前に、一体自分がなにを知っているかを一度じっくりと考えてみたらどうだ。なににも知らなかったという地点に立ってみたらどうだ。知ったか振りをして平然とこれまで生きてきたことに対して、心の底から謙虚になってみたらどうだ。

養老孟司はまた、ナチスの収容所で両親、兄、妹、妻を亡くし、自身もアウシュヴィッツで過ごしたヴィクトール・フランクルが、《共同責任などというものはな》く、《人間のなかに誠実な人と、不誠実な人があるだけである。遺憾ながら、誠実な人のほうが数が少ない。》といい、《私の知っていた最後の収容所長は、自分の小遣いから囚人用の

薬品を買っていた。収容所から家に帰ると、妻にその日の出来事を語り、ともに泣いていた医師もいた。》ことも語り、そういった数少ない誠実な人までナチスのドイツ国民全体として一括りにされて、みえなくされていくことのファッショの危険性について気づかせてくれる。

このフランクルの態度を受けて養老孟司は、《私が親米とか反米という言葉が好きない理由は、おわかりいただけるであろう。》といい、こういう。《アメリカという「なにか」を理由にして、「だれかが」力で無理を押し通す。それに反発する相手がいる。その循環がテロを生んだのであろう。だから私は国益という言葉が嫌いなのである。「いつの」「だれの」益か、それを明確にしてもらいたい。国益とはいまでは環境問題しかない。私は個人的にはそう思っている。片々たる人間の利益ではない。自然のことである。自然がどのような状態に置かれるか、それは未来の人間まで含めた、人類全体の利害に関わる。あとのいわゆる政治経済は、そのときどきのゴミみたいな問題である。時が過ぎれば忘れる。立場が変われば変わる。》

「自然がどのような状態に置かれるか」ということは、人間を含む生命体系がどのような状態に置かれるかということであって、けっして日本人としての問題でもなければ、アメリカ人としての問題でもない。自然の前ではナショナルな問題は吹っ飛んで、ただ人間だけが迫りだしてくるということだ。フランクルが「人間のなかに誠実な人と、不誠実な人があるだけ」というとき、また養老孟司が「国益という言葉」や「親米とか反米という言葉が好きない」というとき、彼らは具体的に存在している一人一人の人間の顔を抽象的なナショナルの殻で覆ってしまっはならないといっていたのだ。

さて、5名の拉致被害者が帰ってきた日本は、北朝鮮のように食糧危機にも見舞われていないし、恣意的な自由度も大きい代わりに、「あんなことならもうすでに知っている」バカの加速化が不景気と共に吹き荒れている最中である。帰国した当初は故郷の人々も優しくしてくれるし、友人たちも大手を広げて受け入れてくれるだろう。社会的な規制は少ないし、食事にも十分満たされるだろう。北朝鮮での暮らしとの比較級が続く間は、日本を結構な国と感謝しつつけるにちがいない。しかし、数ヶ月経ち、一年も過ぎると、そして家族の帰国問題の進展も困難になり始めると、日本という国もまた、バカの加速化に侵蝕されていることに気づき始めるだろう。拉致されていた24年の間に物質的な繁栄と共にバカ化が凄まじい勢いで加速していることを。外から眺めると北朝鮮はとんでもない国であったことを知ると同時に、帰ってきた日本も内から眺めるととんでもない国になりつつあることを否が応でも知るだろう。北朝鮮との比較級で優位に立つ日本という文脈から外れた日本（の人々）とやがて向き合うことになる蓮池さんや地村さんたちの苦悩や葛藤が複雑に待ち受けているだろうが、その中から我々にはみえなくなってしまう日本に関する多くのことが彼らにみえてくるにちがいない。もし日本が多くの「北朝鮮状態」に陥っているなら、彼らの口から率直な批判を聞いてみたいものである。

2002年11月25日記

